

Kumamoto

みつかる。つながる。よくなっていく。

No.548 2018

# YMCA News



2018年4月1日発行  
(毎月1日発行)  
1984年8月15日第3種郵便物認可  
発行所／(公財)熊本YMCA  
〒860-8739  
熊本市中央区新町1-3-8  
Tel 096-353-6397(代)

## 春が、来た。



この春、益城町木山仮設団地から小学校に入学する子どもたち

## 長期化する避難生活。これからの復興のあり方とは。

ひばりのさえずりとあたたかい日差しが、仮設団地にも春の訪れを告げています。  
熊本に住む私たちにとって、春はまた熊本地震の記憶に思いを馳せる時期でもあります。

熊本YMCAが地域支え合いセンターを運営する益城町木山仮設団地(191世帯、462人 3/26現在)と  
御船町木倉地区(南木倉、落合、滝川、西往還、西木倉)仮設団地(141世帯、343人 3/26現在)からは、  
この春、18人が小学校と中学校の入学式を迎えます。

益城町木山仮設団地の小学生は、今年度も路線バスや保護者による送迎でそれぞれ3つの小学校に通います。  
2016年初夏の仮設団地開設以来、熊本YMCAは住民の見守り事業や子どもたちの心のケアなど様々な支援活動を展開してきました。  
日々の活動を通して子どもたちに接していると、表情や言葉から、避難生活に起因する潜在化した問題に気づくことがしばしばあります。

「すべての人々が共に活動できる団体」として被災者に寄り添う活動を熊本YMCAが継続するためには、  
被災者の声、そして子どもたちの声なき声に耳を傾けなければなりません。  
今回、益城町、御船町、阿蘇市の仮設住宅で暮らす住民にアンケート調査を実施。  
一人ひとりの言葉を見つめ、これからの復興支援のあり方について考えます。



## 熊本地震から2年 仮設団地の住民に聞く

益城町、御船町、阿蘇市の仮設住宅に暮らす住民を対象にアンケートを実施(2018年3月)

●あなたが感じる復興度(6段階)  
1 2 3 4 5 6

- ①地震当時の居住地  
②現在住んでいる仮設団地  
③地震当時の被災状況  
④回答した復興度を選んだ理由。復興を実感する時、まだまだと感じる時。また、復興に必要なものなど。



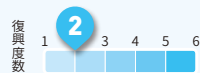
古田 學さん  
(71歳/団体職員)



- ①益城町寺迫 ②木山  
③自宅が全壊。妻は体の半分位タンスの下敷きになって怪我をした。  
④自宅周辺の区画整備事業が全然進んでいない。やっとスタートラインに立ったところ。周りは皆、家を再建している。若干の不公平感を感じている。換地が公平に行われることを祈る。復興には決断とお金が必要。元の土地に残るのか、他に行くのか。災害復興住宅に入るか、支援金をもらうのか...



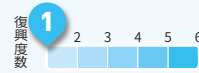
本島 義一さん  
(67歳/自営業)



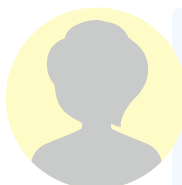
- ①御船町七滝 ②南木倉  
③1回目の時は「地震が来たなあ」と思っていました。まさか連続で大きいのが来るとは。仮設住宅は役場の近くを希望しましたが、いっぱいでこちらに来ました。  
④元の場所に戻るつもりはありません。今後、南海トラフ地震がいつ来るか分からないので、予定も立てられない状態です。公営住宅がどこにできるかも分からないし。また地震が来た時には津波が怖いから高台に作ってほしい。復興のためには、各自健康でいて、良い知恵を出し合っていけばよいと思う。慌てずに。



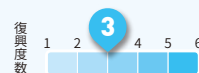
住岡 富治さん  
(74歳)



- ①益城町宮園 ②木山  
③前震では、ベランダから飛び出し、立ってられず地面にへばりついていましたが、家は少し傾いた程度だった。本震で瓦は落ち、雨漏りがひどくて住めなくなった。  
④持ち家ではなく、借家に住んでいたため、新しい所を探しているが、大家さんによっては高齢者には貸したくない様子。不動産会社、大家さんは、高齢者にもっと協力してほしい。



住永 洋子さん  
(64歳/パート)



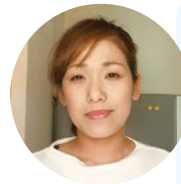
- ①御船町滝川 ②滝川  
④ようやく心に落ち着きがではじめて、先の人生を考えるようになった。東日本大震災の被災者のことを思うと、まだまだ恵まれていると思います。熊本地震の復興にあたっては、皆、平等であってほしいかな。



岡田 真優美さん  
(61歳/農業)



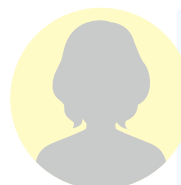
- ①阿蘇市車帰 ②三久保  
③家が全壊で、閉じ込められ、朝方、消防の人に助けられました。納屋も車も潰れて、お墓もバラバラになってしまいましたが、家族3人とも、無事だったのが何よりよかったと思います。  
④納屋は昨年8月に完成。元の場所に家を建てるのは怖くて、赤水に土地を見つけて、もう少しで完成します。しかし、田や畑は土手が崩れ落ちており、まだまだ時間がかかりそうです。阿蘇の復興のためには国道57号線とJRがそのままになっているのが一番の課題。1日も早い57号線の復興を願っています。



園田 由香さん  
(35歳/パート)



- ①阿蘇市狩尾 ②三久保  
③家は大規模半壊。解体しました。  
④自宅の再建がまだのため、自分たちは復興を実感できていない。周りの道路などがきれいになってきている点では、実感する。子どもたちの口から、「家に帰る」ではなく「仮設に帰る!」という言葉聞いた時に、安心できる自分の家を作りたいと思った。イエローゾーンやレッドゾーンのため、元の場所には再建できない。家を建てたいが土地が見つからない。



松永 香奈さん  
(24歳/パート)



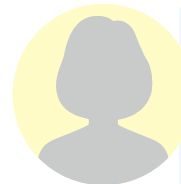
- ①益城町宮園 ②木山  
③前震の時は寝ていて、地震で外に逃げました。本震は熊本市内の親戚の家で。その後はしばらく車中泊して、避難所へ。  
④道が綺麗になって、周囲の建物の解体も進んでいるから。自分自身はまだ家が決まりません。4月から小学校にあがる子どもがいるけれど、ここからだ学校が遠いのでバスで通う予定です。自分で歩いていたらよいのだけれど。



吉村 登喜子さん  
(78歳)



- ①益城町宮園 ②木山  
③地震当時のことを聞かれると、昨日のこのように甦って、心が痛みます。今となっては「命があっただけで...」と神に祈るのみ、と言ったところです。思い出したくないです。  
④私の中では、何も解決していません。家は全壊で更地になり...。人生80年と言いますが、これから先が何年か分からず、考え事をすると、頭の中が真っ白で、悲しくなります。



後藤 晴代さん  
(45歳/アルバイト)



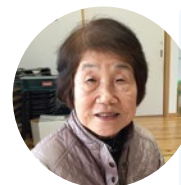
- ①益城町辻の城 ②木山  
③家が全壊  
④町の道路拡張の話が進んでいないため、家を再建できない人もいるし、道路が壊れたままのところもあるから。自分も家を建てようと思っているけれど、なかなか情報が回ってこなくて...。候補の土地はありますが、契約には至っていません。



後藤 隆悟さん  
(12歳/新中学1年生)



- ①益城町辻の城 ②木山  
③いつもは夜9時頃に寝るけれど、前震の時はたまたま起きていた。突き上げるような揺れで、ソファから落ちた。突然のことで、「寝ぼけて、落ちたのかな」と思った。その後、どんどん揺れ出して、それでも、何が起きているのか理解できなかった。  
④周辺の家解体が済んで、新しい家が建ち、仮設団地から出ていく人も増えているから。仮設は狭い。でも、自分が「早く仮設から出たいか」と聞かれると、五分五分。初めは知らない人ばかりだったけれど、友だちもできたし。復興には地域の人との協力が必要だと思う。



中野 紀美子さん  
(77歳)



- ①阿蘇市赤水 ②三久保  
③屋根瓦が落ち、雨漏りがひどく、大工さんが全然来てくれないまま1年が経ちました。2階の歪みがひどく、半壊となったため解体しました。  
④大工さんが8月頃から作業を始めるとのこと、ただ毎日、ぼうっとして待っているだけです。

# あなたが感じる復興度



中島 謙二さん  
(68歳／会社員)



①益城町宮園 ②木山

③前震で家は全壊。熊本市東区尾ノ上の次女宅に移動し、そこで本震を経験しました。家族3人はかすり傷、打撲程度だったのは幸運だったと思っています。

④自宅周辺の公共事業の完了が2021年度とのことですので、先のことの不透明に感じます。取り残されている感じがします。自分の所有地での自宅再建の許可が、いつ、役場から下りるのかも分からず、焦ります。自分や妻の健康、家族の事情を考えると、再建の時期が課題。スピード感を持って進めてほしいです。



小嶺 ひろ子さん  
(68歳／商業)



①益城町木山 ②木山

③地震で、肋骨3本にひびが入り、障がいのある娘の介護にしばらくは大変でした。家は全壊。

④家を建てて、家財道具を購入したり、いろいろ大変です。今は施設にいる娘も含めて、家族全員で暮らせること、木山の街並みが早く復興することが願いです。



澤田 英治さん  
(59歳／会社員)



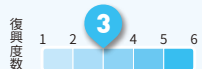
①益城町木山 ②木山

③地震当時は貸店舗で飲食店を営んでいた。ライフラインがつかず、全食材を捨てた。店舗の被災状況も判断できず、閉店。

④私が住んでいた地区は、区画整理の話で2年が経つ。自分は賛成していても反対する人がいる区画はどんどん遅れていて、時間だけが進む。子育てはお金がかかるし、今は不安しかない。復興にはリーダーシップが必要。



藤田 孝子さん  
(61歳)



①阿蘇市車帰 ②三久保

③住宅は半壊でしたが解体しました。

④自宅の再建はできないので公営住宅の入居を希望しています。国道57号線北側復旧ルート(二重ノ峠トンネル)の開通が待たれます。



工藤 いずみさん  
(40歳／パート)



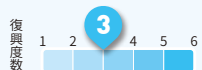
①阿蘇市狩尾 ②三久保

③前震の日は寝られなかったので、本震の夜は、21時くらいに寝ていました。夜中に大きな揺れでびっくりして、外に出たら、近くの山の地響きが聞こえて怖くて、小学校に逃げました。車の中で朝になるのを待っている間にも、数回揺れて怖かったです。明るくなって山の崩れを見て再度びっくり。自衛隊の方に、これ以上山崩れがあったら、小学校まで土砂が来るかもと言われ、中学校に避難しました。

④以前の住居はレッドゾーンで住めない。子どもは、地震の話をして、たまに地震が来た時などは、トイレに一人で行くのが怖いみたいです。いつもではないけれど。



工藤 愛梨沙さん  
(9歳／新小学4年生)



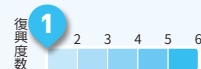
①阿蘇市狩尾 ②三久保

③物が落ちてきて、ガラスも割れました。外に出たら山がくずれる音がして、怖くて小学校に行きました。道がぼこぼこして、怖かったです。

④道がぼこぼこしていたところが治ったりしているし、へこんでいた道も治っているから。復興には、安心して、元気であることが必要だと思います。



渡辺 英通さん  
(76歳)



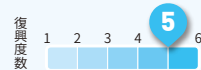
①益城町宮園 ②木山

③前震では家屋は倒れなかったが室内の家具、本棚、キャビネットなどの半分位が倒れました。近くの公園で車中泊をし、翌日は全員で片付け。その片付けた場所に、本震で家具類などが全部倒れて、足の踏み場もありませんでした。自宅も自宅南側の貸家2棟も全壊。後片付けの疲れから、17日朝に気を失い、救急車で運ばれました。

④自宅及び元貸家跡地は、都市計画道路東西線及び、県道益城菊陽線の拡幅予定路線に入っており、予定が立ちません。不動産屋さんにも土地探しをお願いしているが、見つかっておりません。代替地の早期確保が必要だと思います。



光永 伊織さん(右)  
紗寄さん  
(41歳・28歳／農業)



①御船町小坂 ②西往還

③自宅、倉庫が全壊

④倉庫が2棟完成した。一口に熊本地震といっても、差がはげしい。被災状況も様々だし、早く復興に向けて進む人もいれば、「どうなるかわからないからぼちぼち」という人も。うちのんびりしたほうだけれど、下の子が小学校にあがる時には新しい家で...と思っているので、自宅はあと2年以内に完成させたい。これからの復興のためには、仮設住宅や、みなし仮設の住民が住める場所が必要だと思う。

## 協力していただいた仮設団地

- 木山仮設団地(益城町)・南木倉・落合・滝川・西往還・西木倉仮設団地(御船町)／熊本YMCAが地域支え合いセンターを運営
- 三久保仮設団地(阿蘇市三久保)／熊本YMCAの阿蘇キャンプ、保育園を通して支援活動を実施

熊本地震の前震から14日で2年を迎えます。

関連死も含めた熊本地震による死者は250名を超えています。犠牲になった人たちのご冥福を改めてお祈りします。

熊本県の統計によると、今なお避難生活を余儀なくされている人は39,396名(3/25現在)。うち95%以上が仮設団地やみなし仮設住宅で生活しています。

熊本YMCAは震災直後から「誰も置き去りにしない」の言葉を自らに刻み、復興支援活動を続けてきました。アンケートを通して被災者一人ひとりの声に耳を傾けてみると、阪神淡路大震災や東日本大震災がそうであったように、避難生活の長期化により、問題は細分化・複雑化していることが分かってきました。

復興道半ば一住民をとり巻く環境を表現するならば、この一言に尽きると言わざるを得ない現状がアンケートから見えてきました。

行政依存一辺倒にならない社会全体のあり方が、熊本地震から2年を経た今も問われています。

## 4.14熊本地震復興祈念プログラム

熊本YMCAに関わる人々が一堂に会し、熊本地震復興支援について祈念するとともに、これからの支援について考えます。

### 講演会

「熊本地震における災害ボランティアセンターの活動について」  
講師／桂 誠一さん(熊本県社会福祉協議会 熊本県ボランティアセンター所長)

### クロスロードゲーム

支援活動から見えた課題と対策をゲームによって学びます。

協力／くまもとクロスロード研究会

日時 4月14日(土) 10:00～12:00

場所 YMCA中央センター(熊本市中央区新町) 対象 YMCA会員、プログラム参加者、保護者他

申込・お問合せ 熊本YMCA 本部事務局  
Tel 096-353-6397



# 岡総主事の タラン トン Vol.46



## 共に生きる

東日本大震災から7年の時が過ぎました、復興は道半ばで、原発事故の影響もあり、今なお全国で約7万3千人が避難生活を送っています。熊本地震も2年を迎え、依然として約3万9千人が仮住まいを余儀なくされ、困難な中、不安と将来に希望が持てない状況にある方々もおられます。

歴史を振り返ると、1953年(昭和28年)に熊本を襲った6.26水害では、死者行方不明者が

537人、住宅の被害96,000戸、被災者38万人、被害額822億円という被害がありました。熊本市の大半は水深2～3mの泥海と化したのです。(熊本YMCA50年史より)

被災者でもあった熊本YMCAの有志が「社会奉仕班」を結成して、昼は排土作業に汗を流し、夜は避難施設を慰問。また、被災家族の子どもたちを阿蘇キャンプに招待し、夏休みの学習やキャンプ生活を楽しんでもらいました。このように災害や艱難は、YMCAやワイズメンズクラブにとって、その使命と存在意義を再認識する機会ともなりました。

発災から月日が経過する中で、熊本地震をどのように受け止め、どのように復興へ進むのか、私たちは考え、祈り続けています。YMCAは発災直後の避難所運営を経て、仮設団地の生活者の支援、阿蘇におけるボランティアの被災

地派遣、被災者ケアキャンプ等、これからも多くの方々の自立への支援を継続して参ります。

先日は、御船町、益城町の仮設団地で生活されている皆さんと共に佐賀県の呼子で被災者のケアキャンプを行いました。バスの中でのレクレーションや、グループ活動を行い、呼子の朝市も訪れました。「久しぶりに笑った」「同じ仮設でも話したことがない人たちと友だちになった」「元気になった」など感想をいただきました。また、益城町木山仮設団地と御船町スポーツセンターで、運営委員やワイズメンをはじめとする、YMCA会員と共に、被災した地域住民の皆さんとの交流会も実施しました。

YMCAは、今までも、今からも、地域と共に寄り添って、一人ひとりが大切な存在として生きていける、「ポジティブネット」のある豊かな社会を創ることを目指していきます。

## 地震からの「まち」の復興

熊本大学 准教授  
博士(環境学)  
専門分野／都市計画・交通計画  
円山 琢也さん



熊本地震から2年目を迎え、「まち」の姿の復興のスピードは地域によって差が生じてきています。自宅再建が進む地域がある一方、更地が多く残されたままの場所もあります。この差の要因としては、被害の大きさの違いに加え、地元行政のマンパワーの違い、地震前の姿に戻すのか、より良いまちの姿を目指しているのかの違いなどが挙げられるでしょう。

地震前と違う姿を目指す場合、地域住民と地元行政が協力できる関係を築けているか、住民同士が話し合う環境が整っているか、第三者の専門家がうまく関わっているかなども、復興のスピードに影響する要因です。

災害からの復興では、早期の生活再建のために短期間で多くのことを決めていかねばなりません。そのため、住民と行政、あるいは住民同士の対立が生じてしまいがちです。このような場合、理想を押し付けあうのではなく、双方が折り合える未来の姿を前向きに考える場を準備することが重要となります。

期待と不安の両方の声がある益城町の県道熊本高森線を四車線化する計画についての熊本大学の取り組みを紹介します。

具体的には、この県道四車線化計画の空間模型を3種類作成し、町民と話し合いながら将来の道路の姿を決めていくことを試みています。実際にご覧いただいた住民の皆さんからは、「具体的な模型があるとイメージしやすい」、「交通事故を防ぐ工夫をするべき」、「高齢者でも道路横断をしやすいように」などのご意見をいただいています。この模型は、益城町秋津川河川公園内の熊本大学まじきラボで毎週土曜日14～17時に公開しています。関心のある方には、是非一度ご覧いただき、学生や私たち教員にご意見を聞かせてください。

## わたしと聖句

マルコによる福音書16章6～7節

「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。…さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」

### 喜びの卵探し

今年4月1日はイースター。キリストの復活を記念する日ですが、毎年日付が変わるため、クリスマスに比べて認知度もありませんでした。ところが、最近では百貨店で卵を抱えたウサギの小物が販売されるほど、このキリスト教の記念日が知られてきたように思います。

教会ではイースターの日に、子どもたちが隠された卵を探すエッグハントを行うことがあります。この綺麗な装飾やラッピングをされたイースターエッグは、復活のキリストから与る「新しいいのち」を象徴しており、生かされていることへの感謝と、春の訪れを喜ぶものです。

イースターの出来事を記したマルコ16章は、本来は8節までで、9節以降が後世の加筆だと言われています。ここでは御使いが現れて空っぽの墓を示して、復活されたキリストが、弟子たちが生活していたガリラヤへ先に行き待つて待っていると語ります。新しいいのちに与る喜びは、実はもう既に私たちの生活の中に隠されており、「さあ、神さまの恵みを見つけて出してごらん下さい」という卵探しへと導くのです。

新しい春、新生活を始める皆さんが、神さまが既に用意されている祝福に出会い、喜びを豊かに見出し、いくことができるようにと、心からお祈りしています。

日本バプテสต์連盟 菊池シオンキリスト教会  
濱川 耕一



### 熊本YMCAの使命

共に生きる社会 生涯学習の推進 ボランティア活動  
地球環境の保全 ウエルネス活動 平和な世界

### 2018年度基本聖句

コロサイの信徒への手紙 3章14節  
愛を身に着けなさい。  
愛は、すべてを完成させるきずなです。